
とある常盤台の御姉様

Scarlet ZoomAir After The Fainal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある常盤台の御姉様

【Nコード】

N3553T

【作者名】

Scarlet ZoomAir After The Fainall

【あらすじ】

常盤台中学に通うLEVEL5で序列第2位の神流 彩愛がとあるの世界で巻き起こすストーリー。『とある転生の境界操作』は書いている内に適当すぎると思い、変えさせて貰いました。ご理解のほど、よろしく願いいたします。

主人公設定（五月十九日現在）

『名前』

シンリユウ
神流
アヤメ
彩愛

『性別』

女性

『容姿』

青紫色と緋色のオッドアイ。髪は長く、ハーフポニーテイルにしている。髪の色は金色と青紫色のメッシュ。比率は7：3。

『身長』

167cm

『体重』

45kg

『能力』

スタートオペレーション
境界操作

『level』

LEVEL5

『序列』

2位

『魔法名』

Resistance427（運命に抵抗せし者）

『詳細』

常盤台中学の二年生。学園都市最強のLEVEL5の内の一人で、序列は2位。同じくLEVEL5の第4位の超電磁砲こと、御坂^{ミサカ}美琴と第6位の心理掌握こと、櫻鷗路^{サクラオウジ}遙香^{ハルカ}とは親友関係。だが、美琴と遙香の仲は良くなり、彩愛が中間に入ることですれなりの関係が成り立っている。逆に彩愛がいなときは罵りあいや、取っ組み合いになるほどに悪化する。二人とも彩愛に淡い恋心を抱いている。後輩にあたる風紀委員^{ジャッジメント}の空間移動こと、白井^{シライ}黒子^{クロコ}と柵川中学のLEVEL0こと、佐天^{サテン}涙子^{ルイコ}にはお姉さまと呼ばれている。LEVEL5の第3位の未元物質こと、垣根^{カキネ}帝督^{テイトク}には惚れられてお

り、会う度に口説かれる程の溺愛ぶり。また、帝督はアレイスターの計画にはあまり興味がない。LEVEL5の第1位の一方通行はアクセラレータ一度戦った仲であり、友人として接している。同じくLEVEL5の原子崩しの麦野^{ムギノ} 沈利^{シズリ}とは義理の姉妹であり、沈利も彩愛を溺愛している。また、彩愛はグループに所属している。

同じくLEVEL5の原子崩しの麦野^{ムギノ} 沈利^{シズリ}とは義理の姉妹であり、沈利も彩愛を溺愛している。また、彩愛はグループに所属している。彩愛がグループに所属していることにより、沈利がリーダーを勤めるアイテムとは協力関係にある。彩愛の体は特異体質で超能力と魔術を両方とも扱える。基本的に魔術は符術と精霊魔術を使用する。

境界操作

「う、うあ……ば、化け物め……」

――学園都市。東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では『超能力開発』が学校のカリキュラムに組み込まれており、230万の人口の実に八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいる。

「あら、酷いわね。こんな美人を捕まえておいて……まあ、そんな態度をとる貴方には最高の不吉を届けてあげるわ。」

そんな学園都市の内部、複雑な路地裏には一人の制服を着た女子生徒と多数の正に不良とをかたどったような絶滅危惧種並みの格好をした男達がいた。

ただ、男達は一人の男を残し横たわっている。この男達の正体は『スキルアウト武装無能力集団』と呼ばれている、所謂はぐれ者達の集まりだ。

そんな男達は学園都市の裏に関わる小さな組織の一員だった。

しかし、上の幹部が学園都市に逆らう体制を取ってしまい、今の状況に至る。

「くそっ……クソッ！ふざけんじゃねえ！俺がなにしたってんだ。」

その男達に立ち向かう女子生徒は『シンリユウ神流 アヤメ彩愛』。学園都市最強の LEVEL5 の内の一人で暗部組織『スタートオペレーショングループ』に所属している。能力名は『境界操作』。スタートオペレーション。ありとあらゆる境界を操る能力だ。

「貴方が何をしたか、してないかなんて興味ないわ。ただ単にコレが貴方の天命だっただけよ。」

その言葉と共に彩愛は自身の能力である境界操作で男の脳の神経の境界を隔絶させる。

神経を隔絶させられた男は体を動かすこともままならないただの人間となり、ドサッという音とともに地面に横たわる。

「……ク……ソ……が……」

「……GAME OVER。」

動かなくなった男達を一別すると、彩愛は自身の右隣に縦長に円が広がったような、『隙間』と自身が呼ぶものを出現させる。

この隙間は空間に干渉し、そのまま空間の境界を弄くり、新たな次元を造りだした空間だ。この空間には彩愛の誰も干渉することがで

きないので、いつも自身の私物を入れている。

隙間の両端にはリボンがついており、隙間の中は不気味な目が多数此方を覗いている。

そんな隙間の中に彩愛は手を突っ込み、携帯を取り出すとそのまま電話をかけ始めた。

「土御門？弱卒どもの回収よろしく。」

『了解だにゃー。もう仕事はないから帰って良いにゃー。』

「わかったわ。」

彩愛は携帯を切ると隙間の中に携帯を投げ入れ、自身も隙間の中へと入っていった。

彩愛の能力、境界操作は一応能力としては『空間移動^{テレポーター}』の一種に入る。ただ、応用に優れているだけというのが学園都市上層部の意見だ。

まあ、学園都市統率理事会会長のアレイスター・クロウリーの指示だろうというのが彩愛の考えだが。

「操祈、もう寝たの？」

隙間をすり、先程自身がいた路地裏と自身の部屋を繋げ、部屋に戻ると同時に自身のルームメイトである『シヨクボウ食蜂 操祈』に声をかける。
櫻鷗路 遙香。彩愛と同じくLEVEL5の超能力者。能力名は『メンタルアウト心理掌握』。彩愛の親友関係にあたる人物だ。

「……返事がない。ただの操祈のようだ。」

「……いきなりなに言ってるのよ。」

目を擦りながら彩愛のボケに反応した操祈は寝ころんでいたベッドに座り直す。

操祈はこの学校 - 『常盤台中学』の最大の財閥の頂点に君臨している。本人はお遊びと称しているが、流石に疲れるのか彩愛が部屋にいない日は結構すぐに寝ることが多い。

しかし、そんな操祈も彩愛が帰ってくると何故か目を覚ます。

「いや、操祈ってボケると起きるっていう特性があるから。」

嘘だ。嘘以外のなにものでもない。

「……はあ、もういいわよ。とっとと寝るわよ。」

「はいはい。」

そついいながら彩愛は操祈のベッドに侵入していく。彩愛と操祈の間にはルールがある。いや、対価といったほうがいいかもしれない。彩愛が部屋にいないことを寮監から誤魔化す対価として、操祈はその夜、彩愛と一緒に寝ることになっているのだ。

もちろんこれは操祈から言い出したことだ。『私が寮監から庇つてるんだからコレぐらいの対価は必要じゃない？』というのが操祈の主張。まあ、彩愛もそんなことは苦にも思っていないので即OKしたが……相手からしたら『決めるの早すぎない！？』的な心境なのは簡単に思い付く。

「あ、彩愛。ちょっと近すぎないかしら？」

「仕方がないじゃない。シングルベッドなんだから……」

「そ、そりゃ……そうだけど……」

あつけらかんと顔を赤らめれる操祈の問いに答える彩愛。

そんな操祈に気がついた彩愛は『良いこと思いついた』とばかりにそそくさと操祈に近づき、近かった距離をさらに縮めた。そして後ろから覆い被さるかのように抱きつく。

「っ！？あ、彩愛！？ちよっ…なにしてるの！？」

「うん？抱きついてるの」

可愛らしく、酔っ払いかのように操祈の耳元で言葉を発する彩愛。
その声は甘ったるく、膚にされそうな効力を発した。

そんな声を間近で聞かされた操祈は耐えられるわけもなく、そのまま意識を夜の闇の中に落とした。

静寂が訪れた彩愛と操祈の部屋では一つのベッドに至福の時を過ごしているかのような笑顔で眠る（気絶する）操祈と、そんな操祈の背中にくっつき頬擦りする彩愛の姿があった。

超電磁砲

「ねえ、お兄さん達と遊びに行かない？」

「あら？私ったらモテモテね。」

ぐへへといった感じで私に笑いかけるナンパ男、もとい武装無能力者^{アウト}集団の男たち。

本当に絶滅危惧種よね……こんな科学に特化した街にいることが意味不明だわ。

しかも常盤台中学の制服を着てるから高能力者ってことはわかると思っただけだね。

それにきづかないほどにバカなのかしら？

「そうだよお？お兄さん達君にメロメロなんだよお、だからさあホテル行こうよお。」

私の反応にこれはいけると思ったのか、ズイズイとくるハゲやリーゼントなどの武装無能力者^{スキルアウト}集団の連中。

私、イケメンが好きなだけ……ああ、でもイケメルヘンとかは嫌よ？

能力をフル使用してでも拒否するわ。

現在、私がナンパされている場所は学園都市第17学区の一角。夜なのに此処にはたくさんの男女が歩き回っている。

後ろはなにかが詰まっているのであろう倉庫。前方180度には武装無能力者集団の連中が10人程度。

武装無能力者集団の連中の間から見える人々は一概に怒り、呆れ、怖れといった表情をしながら去っていく。

中には私を助けだそうと思って立ち止まる人達もいたが、武装無能力者集団の連中に凄まれて逃げるように去っていく。

これが普通。

こんな状況に首を突っ込むなんて、ただのバカか学園都市最強のLEVEL5のナンバーセブンぐらいじゃないかしら？

「おー、いたいた!」

……いた。

ナンバーセブンではない……ということは、ただのバカの方かしら？

ちょっとした間、この男の行動を試してみるのも楽しそうね。

「こんなトコにいたのか」

何かしら……友人を装ってこと？助けにはいるぐらいなんだから
高位能力者とかじゃないの？

「ダメだろー、勝手にはぐれちゃー」

そっぴいながら私の手を取る謎のお節介な高位能力者じゃないと思
われるただのバカ。

ちなみに、『謎の』から『バカ』までがこの男の呼び名よ？

なら、私はその行為を……

「あら？お兄さん達、この男が私を貴方達から引き離そうとして
るわよ？」

……楽しませて貰うわ。

「ちょっ、おまつ！？」

「なんだデメエ、ナメたマネしやがって……」

「なんか文句でもあんのかよ、アア？」

慌てふためく男。

違ったわね。

謎のお節介な高位能力者じゃないと思われるただのバカが慌てながらせっかく助けてやろうと思ったのに的な目で私を見る。

そして、私の声で『なにこいつ、意味不明』的な目を謎のお節介な高位能力者じゃないと思われるただのバカに向けていたのを、いきなり『アアン？ テメエ、ふざけてんの？ 死ぬの？』的な目に変えて凄みにかかる。

なにこれ……スッゴい楽しい。

「はあ……しゃーねえなあ。」

うん？ まだ、助ける気にいるのかしら？

普通はここでキレて私をおいていくとかするはずなのにね

「ああ、そうだよ。恥ずかしくねーのかよお前ら」

「なんだと？」

…… ああ、この男。ただのバカとかじゃないみたいね。この男はこういうことを見逃せないお人好し。

例えそれが偽善であろうが、困っている人がいるなら自身から介入するタイプのお人好し。

「こんな大勢で女の子一人囲んで情けねえ」

お、そこで此方を見ているのは美琴じゃない。

他の連中も見えてないので手を振ると美琴も振りながら近づいてきた。

「まったく……あんたはなにしてんのよ」

「逆ハーレムって言う状況を楽しんでたのよ。」

近づくなり文句を言う美琴。それにクスクスと笑いながらふざける私。

近くではケンカに発展しそうな雰囲気はただよっているなか、この光景はなんて場違いなのだろうと思ったことだろう。

「まだ子供じゃねえか」

――ピシィ――

ただでさえ夜風で寒いのに、私を助けにはいったお人好しが発した言葉により温度が急激に下がった。

寒い……コタツに入りたくなる程に寒い。

私の親友の一人、LEVEL5の超電磁砲こと『御坂^{ミサカ} 美琴^{ミコト}』。彼女の沸点は結構低い、が、まだ耐えることはできる。だが、絶対に耐えられないことがある。

それは――――

――私への悪口。

何故かはわからないが美琴は私に対する悪口に異常に反応するようになった。

そんな美琴の対応に親しい友人は皆揃ってこう名付けた程だ。

『神流の番犬』

と。

「ねえ、彩愛。やっても良い？」

「……好きにして良いわ。殺しちゃだめだけど」

まだ私に確認するってことはそこまでキレてはないのかしら？

本当にヤバいときは狂人バーサーカーみたいになっちゃうしね……

「……テメエらみてえな奴が一番ム力つくんだよ！」

「私が一番ム力つくのはお前だあ！！！」

「……ギヤアアアアア！！！！！！！！！！」

雷鳴と共に美琴の能力を受けて丸焦げになる武装無能力者集団スキルアウトの連中。

そんななか、あのお人好しの男だけは生き残った。此方に右手を向

け、如何にも『あつぶねえ…』的な表情をしながら

「美琴、行くわよ。もうじき風紀委員ジャッジメントが警備員アンチスキルが来るはずよ。貴女も捕まるのは嫌でしょ？」

「そりゃ嫌だけど……」

どうやら美琴は自分の能力を打ち破られたのが気に入らないようで、お人好し男を睨みつけている。

仕方ないので引きずっていくことにした。

「そうそう。貴方、一応礼を言っておくわ。ありがとね。」

「お、おう。」

先程の場所から離れた場所についた私は美琴を連れて、私の能力でつくった隙間を通してそれぞれの部屋に戻った。

人間

「『幻想殺し（イマジンプレイカー）』？」

『そうだ。我々は彼が持つありとあらゆる異能を打ち消す右手のことをそう呼んでいる。』

「へえ？それって私や『^{アクセラレータ}一方通行』の能力や魔術師達の魔術でさえも消せるってことかしら？」

『ああ、その通りだ。』

現在私は『窓のないビル』の内部、『アレイスター』『クロウリー』がいる部屋にいる。アレイスターとは男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見え、緑色の手術衣を着て、赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さまで浸かっている人間だ。

身体のほとんどを機械で補っているそうだけど……本当かどうかは計り知れないわね。

「おもしろそうね。接触はしてもいいのかしら？『知人』になっ
ていたら結構役立ちそうだし」

『……ふむ。よからう。接触しても君なら私の計画に障害を起
さないだろう。』

「ありがとね。幻想殺しが問題に首を突っ込んできたときに私が手を出してもいい時は『^{アンダーライン}滞空回線』で連絡して頂戴。パシリみたいだけど計画を狂わされるよりはマシでしょ？」

『よかるう。私も暇ではないが、それぐらいならしてやれるだろう。』

じゃあね。といって私は能力でアレイスターのいる部屋からでる。

何故わたしがアレイスターと仲良さげに話しているのかと聞かれても私は、さあ？としか答えることができない。

滞空回線のこともアレイスターからバラしてきたし、計画のこともアレイスターから話してきた。さらには私にだけ献身的になってくれるという不可解ささえある。

本当にアレイスターなのか？と言いたくなる対応の仕方だ。

まあ、あまり気にしないようにしているけど……

「美琴、昨日の奴に会いに行かない？」

「えっ？……………行くわ。」

なにかしら、今の間は……

） 美琴 side ）

私は今、第七学区のコンビニで漫画を読んでいる。

「まさか彩曖に限ってないとは思っけど……」

いきなり彩曖に昨日の私の能力を打ち消した男に会いに行かないかと聞かれた時は本当に心臓が止まるかと思ったわ。まさか彩曖があのむかつく奴に恋したのかと思ったら……想像の中で一億万回は撲殺できるわ。

「それにしてもどこに行ったのかしら？」

私は読んでいた漫画本を元にあつた場所に入れると同時に何んとかく呟く。私に『ちょっと知り合いに用事できたから会ってくるね？だからちよつと待っててね。』とか言われて待たされている私は只今ものすごく暇だ。まあ、彩曖に言われたら別に嫌とも何とも思わないけどね。

「美琴、待たせたわね。」

そんなことを考えているうちに彩曖が私の横に『隙間』を開いて顔を出した。

……私は慣れたからなんとも思わないけど、周りの奴らは結構怖い光景だと思っただけだなあ。実際に顔を真っ青にしてる人とかいるし。

「大丈夫。読みたいマンガも読めたしね。」

「そう？じゃあ、行きましようか。ウニ頭の先輩の所へ。」

「そういえば誰に会ってきたの？」

「ニャーニャー星人。」

「え？」

「え？」

「なにそれこわい」

「そういえばあのウニ頭先輩はlevel 0（無能力者）だけど、幻想殺しっていうものを右手に持ってるらしいわよ。」

にやーにやー星人こと、土御門と人間、アレイスターの所へ行つてウニ頭先輩こと『上条 当麻』^{カミジョウ トウマ}の情報をゲットした私はさっそく美琴に情報提供することにした。

「幻想殺し？」

「そう。異能と呼ばれる物全てを打ち消す能力だそうよ。あと、ついでに一級フラグ建設士だって。」

「なにそのチート。ていうか、フラグ建設士ってなに……」

「女の子を虜にしまくった男につけられる称号。」

「まさか彩愛も……（ブツブツ）」

ちよっ……やだっ……この娘のオーラ黒すぎないかしら？

幻想殺し

「それで、彩愛？その上条とか言う奴はどこに住んでるの？」

歩いているうちに少しは黒さが引いてきた美琴がどうしてもよさそうにウニ頭先輩の住んでいる場所を聞いてくる。

ただ、どうしてもよさそうにして入るけど……どこか恨めしそうに見えるのは幻覚かしら？

「無名校の学生寮よ。レベル0だからお金がなくて貧乏人生真っ只中ってところかしらね。」

「……そう。（ふふふ・・・貧乏ってことを利用して彩愛を同情で引こうって作戦ね？そんな手で私の彩愛に触れるとかおもってないでしょうね……？）」

あるえー？なんだかまた黒くなってきた……。え？こういうのって黒子特有のものじゃなかったの？ていうかなにをどう考えたらこんなに黒くなれるの？

黒いよっ！

寒いよっ！震えちゃうよっ！

周りの眼が痛いよっ!!

「ま、まあとにかく行きましょう。」

「うん。……ねえ、彩愛の能力で行ったらいいんじゃない？」

「……。……？……はっ!？」

「気づいてなかったんだ……。。」

気づいてなかったわけじゃないんだよ!？ホントダヨ？

ホントなんだからね!な、なに?疑ってるんじゃないわよ!!
と、とにかくっ!!隙間、開きまーす!!!!

く学生寮前く

さあ、やってまいりました。

あの噂の『私にやらせて!@説教ヒーロー カミジョーDX』の自
宅前にきております。

「……小さい？いや、レベル0にしては大きいのかな……？」

「小さいでしょ・私たちに比べたら」

「いやいや、美琴さん？私達と比べちゃだめだよ？」

「私達はいわゆるエリート（笑）なのだよ？それをただの一介の高校生ごときの学生寮と比べちゃだめじゃない？」

「え？言い方にとげがある？ごめんなさい。私って裏にいるからあまり上条さん、……いや、『私にやらせて！@説教ヒーロー カミジ ヨーDX』はあまり好きになれないんだよね。」

「善人すぎてちよつとイライラするときってあるし……。まあ、利用できそうだから『知人』にはなるつもりだけど。」

「だって仲良くなりすぎて、もし裏のことがばれたら説教が物凄い勢いで来るじゃない？」

「人殺しも容認できないような表の人間がわざわざ裏に入ってくるなんて話だよ。結局他人がいないとボスのところまでたどり着けないくせに……。」

「とか思っちゃってたりして……。まあ、今は関係ないか。」

「じゃ、ちゃっちゃと入っちゃいませよ。知り合いに行くことは知らせてもらってるから。」

「ん、わかったわ。さっさと話しつけてどこか遊びに行きませよ？」

「あ、それいいわね。たまには違うところもいいかもね。」

「そうね。」

そんなことを話し合いながら上条先輩がいる階までエレベーターで昇っていく私達。なんだかここまできいてなんだけど、めんどくさくなってきた……。

帰っていい？

え？だめ？仕方ないな……はあ

「じゃーおすわよー？」

「それはいいんだけど……なんでそんなにいきなり面倒そうなの？」

「気にしなーい、気にしなーい。」

「いや、まあ、彩愛がそういうならいいんだけど……（面倒そうにしてる彩愛も可愛いつー！）」

はれ？なんで微妙に顔が赤いのかなこの子は……。それにずっと私の顔を凝視してるし……。

はっ！まさか目ヤニでもついてた？恥ずかしい！とらなきゃ……

「……（ゴシゴシ）」

「……（プルプル）」

「……？……（ゴシゴシ）」

「……（プルプル…ブシャアアアア）」

「み、美琴？鼻血が……」

「気のせいよ（ポタポタ）」

「でも——」「気・の・せ・い・よ」「——うん。うん。きのせいよね。うん、気のせいよ。」

あれ？

でもあの手からはみ出てるのって血じゃないのかな？

あれ？あれ？まあ、気のせいだよな？

べ、別に美琴が急に怖くなったとか……そついうのじゃないんだからっ……！

「とにかく押しとじ。」

ピンポーン

「はいはい、ちょっと待っててくれ。」

お、ちゃんといるみたい。よかった、無駄足にならなくて。
でもさ、美琴。

今貴女をみたらきつと上条先輩は引くんじゃないかな？

え？大丈夫？

むしろひかせろ？

え？なんで？

ちょー！そんなに血まみれの状態で近づかないで！！怖いから！！！！

え？あ、ごめん。だからそんなに落ち込まなくても……。

え？キスしろ？

……。……。あ、上条先輩もうすぐ出てくるわよ。早く身だしなみ整
えときましよう。

え？べ、別に逃げてないわよ！？

上条先輩が出てきて百合的展開になってたらドン引きじゃない！？
そついうところを考えたらやっぱりしないほうがいいかなって……

「どなたですかー？」

そんな中上条先輩は出てきた。

美琴相手に慌てふためく私

私にキスさせようとする、制服にべったりと鼻血が付いた美琴

口を開けて、呆然と立ち尽くす上条先輩

……なにこのカオス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3553t/>

とある常盤台の御姉様

2011年10月7日20時41分発行